

道体験にもとづく悟入の境地があるとされる。しかし、近松の浄土観には現世の悲恋を来世で実現しようという現実的欲求があり、西鶴の場合も所詮は人間的欲望の肯定である。すなわち、いずれも現世的基盤にたち、人間的欲求を充足するために、仏教を活用するにすぎない。しかし、芭蕉や一茶の俳諧では、かなり事情を異にし、仏教の本質的な探求がみられる。芭蕉の俳諧が禪的であり、一茶の俳諧が浄土教的であることは、よく知られている。ただし、これら俳諧が禪や浄土思想そのものを詠作するものではないことはいまでもなく、したがって、その仏教信仰が文芸的立場に基いた審美的、情緒的なものであることは当然であった。

以上要するに、近世諸思想の仏教受容は、いずれも信仰的な直接対象としておこなわれていないことがいえる。すなわち、いずれも仏教は各思想形成の契機となり、その意味では、仏教が各思想のなかに沈潜し生かされていることを認めなければならぬが、しかし、そこでは仏教的思考法を仮るにすぎないのであって、いわば仏教は教養的に受容されており、その意味では仏教が本来的なかたちでは生かされていないのである。これは、広くみれば、近世に勃興した諸思想が、一般に反中世的思惟法をとり、現実主義的、人間肯定的精神を基本的なものとしてもっていることによるのである。すなわち、仏教の本質的な否定的精神を受容する基盤に欠けることによるのである。そしてこれは、先にふれた近世仏教思想の三系譜の分裂の問題とともに、近世思想の継承において成立する近代思想の仏教受容の問題として、その本質をなせる上に大きな示唆をなげるものとおもうのである。

仏教と女性

横 超 慧 日

仏教は女性に対して差別的見解を持つという説が、通常多く行なわれているようである。蓮如は御文の中で「女人の身は五障三従とて男にまさりてかかる深き罪のあるなり」と書いた。大峯山などでは、今もなお女性の登山が禁ぜられているという。なぜ女性はそのなかに罪深いものとして、きらわれねばならぬのか。親鸞は阿弥陀仏に変成男子の願があったからこそ女人にも成仏の門が開かれたというし、日蓮も他の経では女人が仏になることは不可能でただ法華経によってのみそれが可能になると言っている。

親鸞や日蓮は女性の成仏を認めぬのではないが、どちらも阿弥陀の仏力もしくは法華の経力によってはじめて可能だということであり、一般的には女性の成仏が特に困難視されているという前提に立っての意見である。それで、最近に出た岩本裕博士の「仏教入門」などの中にも、仏陀自身の女性観や教団内の女性観に論及して、けっきょく、仏教が女性を男性より劣等視したことは明白だと断定しておられる。

また東大の中村元教授は、岩波文庫本の「浄土三部経」の中の解説の部分で、極楽浄土の光景はインドの古代の生活や思想に源泉が求められるが、極楽に女性がいないでみな男性のみであり、

女性は男性に生まれかわって往生すると経典に説かれていることにつき、これは決して仏教特有のものではないけれども、こういう思想の起源はよくわからぬと言っておられる。しかし私は仏教はほんらい女性を蔑視してはいるのでなく、また変成男子の思想も十分仏教内部で跡づけられるのだと考えるので、ここでは焦点を以下三つの項目にしぼって述べてみたいと思う。

第一は比丘尼教団成立の事情である。仏陀は養母の懇請と侍者阿難のとりなしとによって、不本意ながら女性の出家を承認せられた。しかしそこには、たとい受戒して百年になる比丘尼(女性)であっても今日受戒したばかりの比丘(男性)に対して敬礼しなければならぬ等の八つの条件がついていたし、仏陀はこの時、女性の出家を許したために正法の存続が五百年短くなったと言われた、という。

これはいかに男尊女卑の形を呈しているようであるが、これを理解するためにはぜひとも現実の事態を考慮に入れねばならぬ。禁欲生活をしている男性のみの教団の中へ新たに女性が入ってくるとなれば、その後の教団の風紀に関する危ぐ(懼)が責任ある統率者の念頭に浮かぶこと、それは当然ではないか。躊躇は女性を無視したからではない、まず現に成長を遂げつつある比丘教団の健全な発達を望まれたからである。しかも仏陀は宗教上の平等尊重の精神から、けつきよくに於て比丘尼教団の成立を認められた。正法五百年短縮の嘆きは、その結果教団の規律維持がいかに困難となったかを反映するものである。八つの条件は二種教団の円滑な運営を期するためいづれかの一方に優位を与えるとすれば、

先に成立して人数が多くすぐれた指導者も多いとみられる比丘教団の方に優位を与えるという事情から起こったものだ。これについては恐らの異論のないところと思う。女性に対しては男性に対してよりも律がきびしいとの見方もあるが、それは過失に陥る危険がそれだけ女性の方には多いからであった。

第二は女人不成仏を含む五障説についてである。五障とは女性に梵天、帝釈、魔王、転輪聖王及び仏身になることができぬというのをいう。しかし経典では、五障の故に女性は仏になれぬというのではなく、むしろ五障説は之を俗説として斥け、五障と言われるけれども実は女性も仏になるのだと言っているのである。では何故に女性は仏身になり得ぬと世間で言うのか。それは男子であった釈尊が仏になり、仏に特有な身体上の三十二相(その中には男子の性器を含む)を具えたのであるから、仏に成るのは男性に限り女性では仏身になることができぬと信ぜられたためである。こういう定型觀念に基づく五障説は断じて仏教本来の趣旨ではない。だからこの誤解を解くために、大乘経典では男女の性別がならん宗教の本質と関係がないことをし、特に女性の成仏を力説した。

第三は理想の世界である浄土に女性がないということの理由である。人間の苦悩は愛欲を根源とするとみる仏教が、苦悩のない極楽に苦悩の原因たる愛欲の存在を認めたとしたら矛盾もはなはだしい。そこで愛欲の滅無を表現する手段としてとられたのが、女性不在という形で男女の性別をまっ消する方法であった。その場合、どちらでもよいはずなのに男性のみあって女性がいないと

せられたのは、浄土の主である仏が男性であるということも一つの理由であるが、特に注意しておきたいことは、女性が自ら女身であることを強くいといきらうという想念がその中にこめられているということである。女性の徳性に対する社会一般の評価をとりあげて、仏陀は、女性に向かい反省を促されたこともあろう。

また風紀上の警告のために、男性の出家に対し女性の欠点を強調されたこともあろう。いずれにもせよ、女性の間には、自分らについて世間から好ましからぬものとされるような徳性を早く脱皮したいという願いがあったことは事実である。

次に女性特有の生理的苦痛に痛切に感じて、その苦しみから解放されたいとの願があった。これについては、医学の未発達と熱帯的風土のきびしさを考えれば多く言葉をやすまでもあるまい。更に女性がおかれていた社会的地位や待遇の劣悪さも、決して満足しておれるものではなかった。これらの事情は現に經典の中に明記されている所である。

このようにして、浄土には女性がなく男子となって生まれるという説は、主として女性が自ら女身であることをいとうという思想に基づくものであった。これは卑屈心の現われではない。男女不平等に対する自覚というべきで、むしろ女性解放の叫びであったと言つてよいのではなからうか。

ハイゼンベルグの不確定性原理

熊谷直一

物理学で自然を認識する方法は、必ず測定または観測を通して認識をするという方法である。ここに物理学の生命がある。近代物理学はこの方法によって始めて芽を出し、遂に今日の偉大な成長をなしたげた。そしてこの方法がある限り物理学は今後際限なく発達して、人類文化の限りなき向上に貢献してゆくのである。

今日の測定・観測の方法、即ち実験手段は、長さ・質量・時間の三基本量の各々の次元において、昔に比べると驚くべき進歩をなしており、半世紀前には夢想さえしなかつた極微の物質世界が開拓されて来た。多くの実例を列挙したいが、紙面に限りがあるので割愛しなければならない。

ところで、実験手段を進歩せしむれば、自然を認識する精度はいくらでも向上できるものと、物理学者は最近まで固く信じており、この信念をもって行動してきた。ところが、認識の精度には、敢然たる限界があることを示して、物理学に一大警告を与えたのが、表題のハイゼンベルグ (Werner Heisenberg) の不確定性原理 (Unbestimmtheitsprinzip) である。ハイゼンベルグは一九〇一年生れのドイツの理論物理学者で、戦前来日したことがある。いまこの原理を、微粒子の一つである電子 (質量は 0.913×10^{-31}